

巻 頭 言

看護福祉学・看護福祉学部の第二ステージ

この春、看護福祉学部は創設から15年目を迎える。揺籃期を終え人間で言うならこれからは成人への準備期である。看護福祉学部が活気あふれる大人になるために、今後5年間で実施しなければならないことは、なんだろう。

看護・福祉は長い歴史を持つが、学問領域としては、他領域と対等に学術的論争ができるまでには、もう少し時間が必要といわざるを得ない。これからの期間は、「看護学」「福祉学」「看護福祉学」が「学問」として成熟するための正念場になるだろう。今、大学や教育の立場にいる人々はその責任を果たさなければならない。どのような社会や時代を迎えても、柔軟な考えを發揮する次の世代を育てることは、その領域が躍進するための不可欠な要素である。看護学、福祉学はともに実践分野から学問へと発展した分野である。だからこそ、学問として体系化されていない部分を認めつつも、看護福祉学部としては、学問や研究の理論的成熟論争のみならず、社会や臨床への看護・福祉の実践を通じた有効性や貢献を強く意識する必要があるだろう。

看護と福祉は「実践の学問」であることを忘れてはいけない。博士課程、修士課程を修了した看護・福祉職がこれから増えていくだろうが、本当に重要なことは、市民、利用者、患者の皆様から「実力ある看護・福祉職がケアすると、その効果がはっきり違う」ということを実感してもらうことである。学歴のみではなく、日常的な看護・福祉活動を通じ、社会から「看護・福祉職は役に立つ実力ある集団だ」と評価されることが必要である。

看護・福祉が独自の領域を持ちパワーある職業集団になるためには、臨床の看護・福祉の実践と成果を、看護・福祉職でなければ伝えられないきめの細かい、かつ客観性あるデータとして開示することが求められている。これこそ、臨床と研究者が一丸となり実施確立しなければならない緊急課題と考える。

以前テレビ放映された番組の中で印象に残る言葉があった。1986年施行の男女雇用機会均等法の原案を作成した元文部大臣赤松良子氏が、原案と一緒に作った後輩である労働省の女性プロジェクトチームに、当時語った言葉である。「女性は今、モーレッツに勉強しなさい。モーレッツに仕事をしなさい」「今の法律は醜いアヒルの子だけれど、まず法律を誕生させることが大切だ。次はあなたたちの世代が、いい法律にしてね」と。それから12年後、後輩たちの手で「男女雇用機会均等法」は改正された。

今、私たちも地道にそしてモーレッツに学び仕事する時期である。看護・福祉界も、先輩方の努力の上に現在がある。それぞれの世代が担うことを整理し、挑戦、実行することが大切である。そして他職種から見て、「たくましく、頼りにされる、そしてしなやかでカッコイイ憧れられるような、魅力あふれる集団」になりたい。身近な学生たちから、そう思われる教員であり実践者でありたい。中高生には将来あの看護福祉学部で学びたい、現役学生には自分の子供を学ばせたい、と思われよう看護福祉学部をめざしたい。

昨年開催された第3回看護福祉学部学会では、看護福祉学部の卒業生をメインゲストに迎え、当別町における活動を取り上げた。小さいけれども確実に芽は育っている。昨年の学会テーマ「発想する、行動する看護学・福祉学」を今もう一度心に誓った。

2007年3月31日

北海道医療大学看護福祉学部学会

第3回学術大会大会長 齋 藤 いずみ